

# 生物相丁寧記録

## 弘大、開始から2カ月半

世界遺産登録30年

### 恵みの山 白神

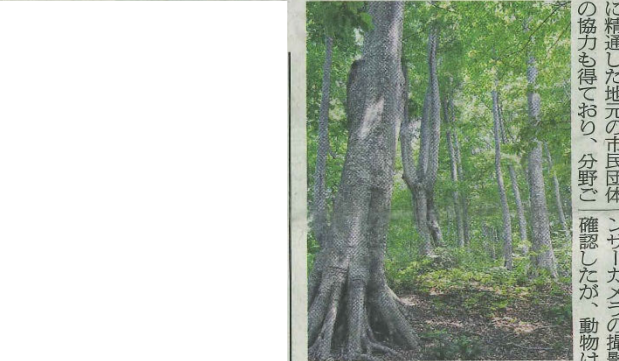
# 遊山道で集中調査

## 昆虫など新種発見へ期待



白神山地が今年12月に世界自然遺産登録30周年を迎えるのに合わせ、弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センターは4月から、白神山地の生物相を総合的に調査している。白神の今を記録し、将来の自然保護・保全に役立つ比較可能なデータを1年かけて採集作業を続ける。

青空が広がった6月17日に精通した地元市民団体、中村教授と学生、津軽昆虫同好会の協力者らが、重点調査地である鱒ヶ沢町黒森地区の「白神の森遊山道」に集まった。遊山道エリアは遺産地域から約20キロ離れているが、白神山地の一部で、核心地域同様の森林景観を保っている。広大な白神山地を1年で調査するには無理があるため、総合調査は遊山道で集中的に行っている。



白神の森遊山道内部のブナ林。白神山地核心部を保持する森林景観を保っている。

調査項目は維管束植物、昆虫、キノコなど、各分野の口元のチューブと手元の入れ物がつながった吸虫管を使って昆虫を採集する中村教授(左)ら。17日、鱒ヶ沢町黒森地区の「白神の森遊山道」

このグループのメンバー各自が定期的に採集作業に取り組んでいる。調査の目的は今ある生物相を記録し、リスト化すること。環境写真の記録も行う。

中村教授らは週1回のペースでこれまで、10回以上遊山道を訪れた。17日は、以前設置したマレーズトラップと呼ばれるテントのようなものを確認したり、遊山道内を巡回して葉や枝にいる昆虫を吸虫管と呼ばれる道具で採集したりした。木の幹に設置したセンサーカメラの撮影内容も確認したが、動物は映っていなかった。

調査はこうした地道な採集作業と、膨大なデータや標本の取りまとめ作業が続く。中村教授は「これから季節ごとに虫や植物も変わってくる。丁寧に調べているので新種が見つかる可能性もある」と期待を込め、調査活動に精力を注ぐ。

中村教授ら同センターは24、25日に同遊山道で市民参加型の生物多様性調査イベント「白神バイオブリック」を開催する。バイオブリックは親子や専門家が一緒に24時間どれたけの生物を調べられるかに挑戦する催しで、海外では欧米を中心に20カ国以上で行われているという。今回の総合調査の一環でもあり、調査報告書にバイオブリックの結果も含めることにしている。1年間の調査結果のまとめは今年度内に出版する予定だ。

上記の画像は、当該ページに限って”陸奥新報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。